

ひとを育てる活動

現地パートナーとともに支援するピラーン、チボリ、マノボ、ムスリム等、各民族の子どものページです

医大生ジェニーの手紙

7月にダバオ医大に入学して忙しい日々を送っています。大学時代とは比較にならない勉強量です。医大進学を勧めて頂き、そのために会計学科から生物学科へ入学し直した経緯もあり、今までの、そして現在のご支援を考えると、落第したらどうしよう、どうなるのだろうと、とても心配です。ですが、勉強に専念してその心配を払拭する方が賢明だと、睡眠は4時間程度にして、勉強しています。

授業は8時から5時までで、また時には7時半まで補講があるときもあります。指導教授によっては、土曜日に補講が行なわれます。



上：部屋の隅に置かれたベッド



右：パソコン傍らに勉強するジェニー

下宿は、台所や食堂が共同で、もう一部屋に姉妹で先輩の医大生がいます。とても親しくなり、悩みを聞いてくれて、助言や励ましをもらい、精神的にとっても助かっています。

ご支援がなければここに至ることはできませんでした。心より感謝しています。神様にも自分の歩むべき道を示して下さいと祈り、特によい成績を上げられるようお願いしています。卒業したら、だれもがより幸せになるように、医師として知識と技能を生かしたいと思います。

(ジェニーの医大奨学金は、ノートルダム大学理学部生物学科4年間に引き続き、会員の平賀さんに支えていただいています。)

創立56周年を迎えたSCMSI校と今後の支援

8月下旬、今年もSCMSIから創立記念祭Lemlunay Festival (9/13-15) の案内が届きました。ミンダナオはまだ戒厳令下にあり現地訪問の予定がたたず、お祝いメッセージのみ届けました。

サンタクルスミッション(SCM)の歴史は、チボリ民族の首長が、ピラーンの村ポルールのパッションニスト修道会を訪ねて、支援を依頼したことから始まります。一方、日本が教育支援を始めたのは、チボリ国際里親の会/JOFPAの1980年1月で、37年が経過しました。

JOFPAとして一旦終了した活動を、私たちが引き継いでからは5年目です。会員の皆様の中には里子支援歴38年目という方もいらっしゃるかと思います。

半世紀以上にわたるSCM学校法人(SCMSI)によるチボリの子どもの教育事業は、他に学校がなかった時代はもちろん、すでに公私立合わせて小学校46、ハイスクールも8校と増えた今もなお、レイクセブ町の人口の約半分(4万人)を占めるチボリ民族の伝統を継承する私学として重要な役割を果たしています。

一方で、私たちの支援は会員の漸減により、支援額を減らしてきました。今年度の月額8万ペソは、SCMSI小学校3校の教師の給与の約7割に当たります。

3年後の2020年には、日本の市民がSCMSI校を通じてチボリ等の先住民族支援を始めて40年になります。

教育に関する現地のニーズも確認しながら、どう続けるか、あるいは終わるか、議論を始めてよい時期かもしれません。皆様もどうぞご意見お寄せください。

奨学生や里子等の個人対象か、給食などの全体支援か ーすべての子どもが初等教育を終えるためにー

小学生のスカラ候補リストから(CMIP)

後期開始を前にCMIPから奨学生候補リストが届きました。

3月に卒業した7名にかわる小学生のスカラ候補です。

父親の職業、年収のほか、牛馬所有か、畑があるか、広さ等は、家庭の経済的背景がかなり詳しく記されています。

①農場の日雇い労働者・7000ペソ(約1万5千円)、②CMIPのドライバー・約15万円、③CMIPバンリ小の教師・約18万円

上記3例については、①を除き、年1200ペソ(約2500円)の奨学金は不要と思われるケースです。しかし、③の1年生マーク(写真・下)の推薦文には「父親は長年CMIP校教師として、辺境の学校で頑張っている」とありました。

みんな貧しい中で、最貧世帯を選ぶのは大変な作業です。安い給与で長くCMIPに貢献した教師の子どもにするのが無難かもしれませんが。最貧層の子ども選択が難しいのであれば、初等教育は給食等全体支援のほうがいいのではと思える事例です。

里子の現況報告から(SCMSI)



チボリの
5年生
ダン

算数が得意の5年生ダン(写真・上)は4人兄弟姉妹の3番目で、父親の職業は農業と記入されていますが、添えられた手紙には、「父は農場の日雇い労働者で、母が近隣の洗濯をして少しお金をもらいます。続けて支援いただき感謝しています」とありました。



ピラーンの
1年生
マーク

SCMSIの里子は、授業料他の校納金(小学生は月約300円)が免除されます。ダンの場合、厳しい家計に嬉しい特典です。一方で、十分な収入がある家の子どものみです。里子の現況報告が届くこの時期は、すべてのデータに目を通しながら、今後の支援の在り方を考える機会になっています。